

令和4年度病害虫発生予察情報 発生予報第7号

令和4年8月30日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
大豆	紫斑病	全域	—	平年並	配付種子量からみた種子更新率は平年より高い(－)。 天候予報(仙台管区气象台8月25日発表)によると、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている(+)	開花後20～40日頃に薬剤を1～2回散布する。その際、薬剤が莢に十分付着するように散布する。 適期に収穫を行い、収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。
	吸実性カメムシ類	全域	—	平年並	8月の巡回調査では、発生量は平年並だった(±)。	発生がみられる場合は着莢期(8月中下旬)～子実肥大期(9月上～下旬)に薬剤防除を実施する。
	フタスジヒメハムシ	中通り 会津 浜通り		平年並 やや多い	8月の払落し成虫数は、 浜通りで平年より多かった(+) 。	発生がみられる場合は子実肥大期に薬剤防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

大豆	<p>■マメシンクイガ</p> <p>3年以上連作しているほ場では、被害が急激に増加します。薬剤防除を適切に実施してください。</p> <p>使用する薬剤等の詳細は病害虫防除所ホームページ掲載の「ダイズ病害虫防除対策(8月)」及び「ダイズ病害虫防除対策(9月)」を参照してください。</p>					
----	---	--	--	--	--	--

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年より高かったが、発生程度は低かった(±)	
	褐斑病	全域	—	やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	本病の発生が多い場合は、農作物病害虫防除指針等を参照して防除を行う。
	炭疽病	全域	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	降雨が多い場合は9月上旬以降も防除を行う。
	キンモンホソガ	中通り 会津	— —	やや多い 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、 中通りでは平年よりやや高く(+) 、 会津では平年並(±) であった。	本種の発生が多い場合は、防除を行う。

	シンクイムシ類	全域		平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。	
	ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。		
	ハダニ類	全域	—	やや多い	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。	
モ	モ	せん孔細菌病	中通り	—	やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。 天候予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている(+)	秋雨や台風の襲来が予想される時期なので、天候に注意しながら秋季防除を必ず実施する(令和4年8月30日付け令和4年度病害虫防除情報(モモせん孔細菌病)参照)。
		モモハモグリガ	中通り	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年より高かったが、発生程度は低かった(±)。	
		ハダニ類	中通り	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年より高かったが、発生程度は低かった(±)。	
ナ	シ	黒星病	全域	—	やや多い	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。 天候予報によると、向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている(+)	「幸水」収穫後に秋期防除を行い、来年の伝染源となるりん片への感染を防止する。
		シンクイムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	シンクイムシ類の発生が多い場合は、防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。
		ハマキムシ類	全域	—	平年並	果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
		ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	園内の発生状況を確認し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
果樹共通		カメムシ類	全域	—	平年並	リンゴ、ナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。 フェロモントラップへの誘殺状況は平年並であった(±)。	園地への飛来を確認したら薬剤散布を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

果樹共通	<p>■果実吸蛾類</p> <p>果実が成熟し始めると、果実吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。果実吸蛾類は山林原野に生息しているため、そういった場所に近い園地では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜（砂糖 200 g、酒 200cc、酢 200cc、水 1400cc を混ぜ合わせたもの）を誘引源とした食餌トラップが有効です。</p>
モモ、スモモ、オウトウなどの核果類	<p>■コスカシバ</p> <p>病害虫防除所で設置しているフェロモントラップ（県北地方 1 地点）において、7 月 4 半月以降の誘殺数が過去 3 年に比較して多い状況であり、発生密度が高まっているおそれがあります。コスカシバに対しては、収穫後に薬剤を用いて樹幹部及び主枝に散布を行います。また、落葉後に虫糞が出ているところを見つけたら、金づちか木づちで軽くたたいて圧殺します。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は、 平年並であった(±)が、発病程度の高いほ場が多かった(+) 。	多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	すすかび病	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった(±)。	葉かび病の病徴と酷似しており、肉眼での判別は困難のため、換気を十分に行い、少発生時から防除を行う。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 施設開口部をネット被覆していない場合、発生に特に注意する。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年より低かった(-)。天候予報によると、向こう 1 か月は気温が高いと予想されている(+)	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
夏秋キュウリ(露地栽培)	べと病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年並であった(±)。 天候予報によると、向こう 1 か月の降水量は平年並が多いと予想されている(+) 。	降雨が続くと発病しやすくなるため、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年よりやや低かった(-)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。

	褐斑病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、曇りや雨の日が多いと予想されている（＋）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	つる枯れ病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年よりやや低かった（－）。天候予報によると、向こう1か月は気温が高く、曇りや雨の日が多いと予想されている（＋）。	低密度時から防除を徹底する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。 抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年よりやや高かった（＋）。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ ※過去7年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年よりやや高かった（＋）。	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。
	黒斑病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年よりやや高かった（＋）。	降雨が続くと発病しやすくなるため、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は例年より高かった（＋）。	気温が上昇すると急激に増殖することがあるので、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。

リンドウホ ソハマキ	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であつた（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
---------------	-----	---	-----	--------------------	-------------------------

注) 予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト（被覆栽培）	<p>■タバココナジラミと黄化葉巻病</p> <p>2006年にタバココナジラミ・バイオタイプQの発生が本県のトマトで確認されており、本種が媒介するトマト黄化葉巻病ウイルス（TYLCV）も確認されています。</p> <p>本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染，種子伝染，土壌伝染はしません。また、タバココナジラミ以外のオンシツコナジラミ等による虫媒伝染はしないため、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内での発生密度が高くなるないように発生初期から適切な防除を行ってください。</p> <p>また、未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意が必要です。</p> <p>病害虫防除所 HP に掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病（TYLCV）のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/450800.pdf</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf</p> <p>■トマトかいよう病</p> <p>ほ場での発生が確認されています。本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p>
野菜・花き共通	<p>■タバコガ類</p> <p>巡回調査において、生長点・果実の食害が確認されています。また、会津・浜通り北部ではフェロモントラップの誘殺数が多くなっています。本種は、トマトやキクの新芽や果実の内部に潜り込んで食害します。寄生や被害が見られた場合は速やかに防除を行ってください。</p> <p>■ウイルス病（アブラムシ類、アザミウマ類媒介による）</p> <p>アブラムシ類が媒介する CMV の発生を確認しています。ウイルスの感染を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p>

○侵入を警戒している病害虫

かんしょ（サツマイモ）	<p>■サツマイモ基腐病</p> <p>本病は糸状菌で、サツマイモ塊茎の腐敗や葉・茎が枯れる病気です。はじめに地際部の茎が黒～暗褐色に変色、腐敗し、やがて茎葉が萎凋し、枯死します。発病が諸梗（茎と塊根を繋ぐ部分）を経て塊根まで拡大すると、なり首側から塊根が腐敗します。罹病した塊根やつるで伝搬し、植物残渣が翌年の伝染源になります。</p> <p>本病は平成 30 年に沖縄県で初めて確認され、その後、急速に発生が拡大し、近県の群馬県、茨城県、東京都、千葉県、岩手県で発生が確認されています。</p> <p>発生県からの苗購入があることから、本県にすでに侵入している可能性が高く、ほ場にまん延すると防除が困難にな</p>
-------------	--

	<p>るため、生育不良の株を見つけた際には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病虫害防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>
夏秋トマト（被覆栽培）	<p>■トマトキバガ</p> <p>本種は体長約5～7ミリの微小な蛾で、南米大陸が原産です。トマト等のナス科作物に大きな被害を与えており、幼虫がトマト類の茎葉や果実、ナス科作物の茎葉を加害します。</p> <p>本種は令和3年に熊本県で国内初確認されており、その後九州各地、和歌山県と徐々に発生が拡大しています。</p> <p>7月現在、本県における発生は確認されていませんが、発生地域からの飛来や、苗等を介した持ち込みにより、今後県内においても発生する可能性があります。発生が疑われる場合には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病虫害防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>
夏秋キュウリ（露地栽培）	<p>■スイカ果実汚斑細菌病（ウリ科野菜果実汚斑細菌病）</p> <p>本病は、スイカ果実汚斑細菌病菌(<i>Acidovorax avenae</i> subsp. <i>citrulli</i>)に汚染された種子が原因で発生する場合がありますことから、我が国に輸入される種子の輸出国の栽培地における検査や輸入時の検査により、国内への侵入防止に努めているところです。</p> <p>本病は細菌によって引き起こされるウリ科野菜の病害で、種子伝染します。感染種子による幼苗の発病、かん水や接ぎ木による育苗期の二次感染、罹病苗の定植による栽培ほ場でまん延することが知られています。感染すると幼苗から果実まで全ての段階で被害を与えます。特に、果実に感染すると、最後には腐敗果となり、ほ場全体に壊滅的な被害を与えます。</p> <p>種子消毒済みの健全種子を用い、育苗期、ほ場での栽培期においては、登録農薬（銅剤等）を散布し、本病の発生の予防と、万が一発生した際の拡大防止を行ってください。</p> <p>ほ場にまん延すると防除が困難になるため、疑わしい株を見つけた際には、各農林事務所農業振興普及部・農業普及所、病虫害防除所又は農業総合センター生産環境部作物保護科へ連絡ください。</p>

詳しい発生状況や防除対策は、福島県病虫害防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。
お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

◆福島県では6月10日から9月10日まで令和4年度農薬危害防止運動を実施しています◆
農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。